
高校生日本語教師

Jun

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生日本語教師

【Zコード】

Z0347Y

【作者名】

JUN

【あらすじ】

吉田龍一は、ごく一般的な高校2年生。父親の転勤で、オーストラリアの高校に転入することになる。そして、あるきっかけから、日本語を教えてほしいと頼まれる…

小説「高校生日本語教師」を「」見頂きありがとうございます。作者のことを申します。

私たち日本人は「外国語」と聞くと、最初に思い浮かべるのは「英語」ではないでしょうか。中学校から学び始め、高校や大学でも勉強する方も多いことでしょう。今では、小学校でも「外国語教育」を必修科目としたことから、外国語の代表?である「英語」を選択する小学校が多々あります。

更に街中を歩くと、様々な英語表記が目にきますし、英会話スクールや英語の教材などの広告が、テレビや新聞、インターネットあるいは電車の中づり広告などにあふれ返っています。多くの広告で学習者や顧客を増やそうと、様々なキヤッチ「」が使われています。

確かに中には効果的な物もあるでしょう。しかし、はたして本当に有効な学習法なのかはたまた詐欺まがいの学習法なのか判断に悩むこともあるかと思います。これらの判断基準として、荒川（2004）は、「これがもし、日本語を学びたい外国人のための宣伝だったらどうだらうか」と考えるべきだと述べています。私もこの意見に賛成です。以前、家で取つていて新聞広告に「1日10分3か月英語を聞く」といった画期的な?学習法が紹介されていました。荒川（2004）の述べるよに、もしこれが「日本語をほとんど話せない外国人が、毎日10分日本語を3ヶ月聞いて、話せるようになるか」と考えれば、おのずとその効果のほどが分かるのではないでしょうか。

これを見て、「でも日本語は世界一難しい言葉だから...」などと思つた方。そんなことはありません。それは、思い込みに過ぎないのです。私も現在、地元のボランティア教室で外国人に日本語を教え

ています。しかし、日本語が「世界一難しい言葉」とは思えません。多くの外国人学習者が、レベルの程度こそあれ、日常会話を無難にこなしています。言葉の難易度は、対比する言語と比較して決定されますし、日本語は比較的「やさしい」部類に入るのではないかと思われます。

意外かと思うかも知れませんが、日本語の音声は非常に少なく単純ですし、文法もきわめて規則的で例外がほとんどない言語と言えるでしょう。つまり「会話」をする面では、極めて簡単な言語と言えます。一方で、何故日本語が非常に難しい言語だと言われているのかといえば、「文字」がひらがな・カタカナ・漢字と3種類あり、ひとつずつ文すべてが出てくること。敬意表現が複雑で、敬語も「尊敬語」「謙譲語」×2種類、「丁寧語」そして「美化語」と分類され、さらにそこに「ウチとソト」の関係やコンテキスト（文脈・空氣）といったものに大きな影響を受ける言語であるからではないでしょうか。ここで、紹介した内容は後々物語の中で取り上げ、あるいはコラムとして説明・解説していく予定です。

この物語では、高校生の吉田龍一^{よしだりゅういち}がオーストラリアに家族の都合で編入するところから始まります。また物語で使用される教科書はスリーポイントネットワーク社の『みんなの日本語初級？・？』とさせていただきます。これは私の所属するボランティア教室で、おもにこの教科書を使って授業しているからです。普段も使用している教科書の方が、仕組みやポイントなども分かりやすいので、何卒ご理解のほど、お願い致します。

最後に、この物語は私にとって初めての作品となります。その為、ストーリー上様々な矛盾やつたない表現、あるいは更新が大幅に遅れる事もあるかと思いますが、何卒暖かく見守つて頂けると嬉しいです。

はじめに（後書き）

引用：

荒川洋平（2004）『もしも：あなたが外国人に「日本語を教える」としたら』スリーエーネットワーク 17頁

訂正：教科書はスリーエーネットワーク社の『みんなの日本語』です。

投稿前にチェックしたつもりでしたが、本日改めて読み直して、誤ったタイトルになっていたため、訂正いたしました。（11月15日）

第1話 思いがけない噂

吉田龍一は、県立高校に通う高校2年生だ。入学して以降、「」くありふれた高校生活を満喫していた。そして、外国にあこがれる一方で、英語は全くの苦手で、先週行われた一学期期末テストの英語答案を見て固まっていた。

（赤点は免れたけど、マジでギリギリ…）

龍一は内心ホッとしたのと同時に自己嫌悪のようなものを感じていた。

（このままの英語力では、夏休み以降マズイ…なんとかしなくちゃなあ…だけど、今週答案返却があつて、再来週終業式で夏休みか）
龍一は内心ホッとしたのと同時に自己嫌悪のようなものを感じていた。

夏休みに特に何をするわけではないが、やはり休みとなると嬉しい。散々な期末結果を受け取りつつ、なぜか国語だけは学年最高点をたき出した龍一は、友達から遊びに誘われたが、（本人も行きたいが）断つて、いつもより早めに帰宅した。なぜなら、母親からこんな意味深なメールが届いたからだ。

大変なことになつたから、学校終わつたらすぐ帰つてきて

絵文字もなく常に事務的な母からのメールを受け取り、言われた通りすぐに帰つて來たのだ。一体「大変なこと」とは、何なのかと考えながら家に向かつていると、スーパーから出てきた近所のおばさんから声をかけられた。

「あら？ 龍一君。オーストラリアに引っ越すってホント？」
「はあ？ オーストラリアっすか？ なんで？」

「詩織ちゃんから聞いたんだけど…お父さんの転勤だつて…」

「へつ？」

詩織は龍一の妹だ。今年中学2年生になつた。頭にいっぱいの「？」を浮かべながら、とりあえず家に向かつ。その間、ほんの数百メートルだが、先ほどと同じような質問を周りからされ、ますます困惑する。一体、なんでこんな変な噂が立っちゃつたんだろう？そんなことを考えながら、いつの間にか家についていた。

第2話 父の転勤

「ただいまー」

龍一は玄関を開けた。とりあえず、先ほど聞いたオーストラリアの件の真相を確かめなければならない。家に入ると妹の詩織が部屋から出てきた。中学生とはいえ、まだあどけなさが残る。

「あっ、お兄ちゃん。おかえり~」

龍一は噂をばらまいているであろう張本人に、事の真相を確かめる。詩織、さつき隣のおばさんから、オーストラリアがどうのこうのつて聞いたけど、ありや何だ?」

「あ、もう知つてたの?お父さんオーストラリアに転勤だつて…」

「はい?あの、冗談は短ければ短いほどいいんだぜ?」

「別に冗談言つてないよ。私もさつきお母さんから聞いたんだから

⋮

別にからかわれている訳ではなさそうだ。詩織もいたつて真剣に言つている。

「マジ…で?」

「マジだもん」

そんなやり取りを入口でやつていると、再び玄関が開いた。

「何だ、お前たち。そんなところで話してないで中入つたらどうだ?」

⋮

まさに噂をすれば影、渦中の父親が会社から帰つてきた。

父親は某中小の商社に勤めている。今年、オーストラリアに拠点を新たに作る人材として、転勤が決まつたそうだ。引っ越し費用や子どもの学費等も、現地で必要なものはすべて会社側で負担してくれる条件も提示された。ただし、日本の学校に残る場合は、その分のお金は出ないらしい。

そして、来月(8月)中旬に現地へ引っ越さなければならぬにそ�

だ。現地の高校は9月から始まる為、会社の方で転入する手続きをしてくれるそうだ。ただし、クラスはESL（English as a second language）である。これは、英語を母語としない人たちが集まるクラスであり、1日に何回かはこのメンバーで勉強することになる。ESLと留学生は別物だ。留学生は自分の意思で、英語を勉強しに来るためある程度の英語運用能力も求められる。一方 ESL は家族などの都合で、ある意味やむを得ず現地校に入学することになった正規の学生である。つまり、英語があまり出来ないのを前提としているのだ。妹の詩織も中学校で同様に ESL 生として転校することになる。

英語力もなく、龍一は日本に残ろうとしたが、やはり会社からの援助が大きく影響し、結果的に押し切られた格好だ。はたして、これからどうなるのか。

第3話 出発準備（前書き）

読んでいただきありがとうございました。今回はまだ、日本ですがそろそろ旅立ちが近付いてきました。

衝撃的な事実を知った翌日、龍一は高校の担任に退学と転校の事を話した。

「あの、先生。今学期一杯で学校辞めます。」

「なんで？」

「えっと、オーストラリア行きます」

「えつ？ どして？」

「家族に押し切られた…」

やはり、担任もあまりの事態に言葉を失っていたようだ。ちなみに龍一の担任は、英語担当。当然、中学レベルの英語力も無いことを知っている。周りからも、一体どうしていくことになつたのか、英語力は大丈夫なのかと散々聞かれた。いや、聞かれなくとも自分の英語力は皆無に等しいことくらい、龍一にも分かっているし、そもそもなんでオーストラリアに行く羽目になつたのかも、自分自身でさえ理解出来てないのだ。説明できるわけがない。

父親の会社の人が自宅に来て、色々転入に関する書類（全部英語だ…）を作るのを手伝つてくれて、その他パスポートの発行、就学ビザの申請など行つた。

準備の最中、留学経験のある親戚の叔父さんが、「向こうで日本語教えるかもよ」と、一冊日本語の教科書を渡された。叔父は留学時代に地域コミュニティに溶け込む為、日本語をボランティアで教えた経験を持っていた。今では、家の近くで行われている「日本語教室」で、ボランティアもしている。

教科書（しかも新品だ）を1冊譲つてもらつた龍一だつたが、本人がほしいのは日本語の教科書ではなく、英語の教科書なり参考書な

のだ。もはつた時に、パラパラとページをめくるだけはしてみたものの、中身は一切見ずお礼だけ言って、荷物の中に放り込んだ。（英語を覚えるだけでも手一杯なのに、日本語を教えるなんて無理だろ…）

まあ、時には日本語が恋しくなるかもしないから、持っていくかくらいにしか思っていなかつた。

そして、間もなく出国の時が近づいていた。

第4話 入国許可といひある騒動（前書き）

3日目で100アクセスを超えたのです。『J愛読ありがとうございます。』
今日はようやくオーストラリアへ到着ですが、ちょっとしたトラブルが…

第4話 入国許可ひとある騒動

龍一・詩織と両親は、成田空港の出発ゲートにいた。今まで住んでいた借家は解約し、不要となつたものは、リサイクル店に持つていくなじして処分した。オーストラリアに持つていくものは、着替えなどの生活必需品と本などである。ただし、本も荷物になるので後に航空便で送つてもらうことになるだろう。龍一はかなりの読書家だ。主に小説を中心に入りでいるため、その読解力が国語だけ最高点をたたき出せる源になつてゐるかも知れない。ただし、勉強用の参考書籍は大の苦手で、小説以外には普通に漫画を読んでいた。詩織は英語が比較的得意なようだが、それでも中学2年生レベル。龍一とあまり変わらない。彼女も漫画は大量に持つていて、それも航空便で送られてくる。

長旅が過ぎて、ようやくオーストラリアのシドニーへたどり着いた。ただ、入国審査で父がちょっととしたトラブルに巻き込まれる。それは荷物チェックで不審物などがないか調べる時であった。

父親と係官が何やらもめている。英語はよく分からぬが、別室に送られたようだ。1時間ほどして、父親がうんざりした様子で戻ってきた。

「どうしたの？」

とりあえず、聞いてみる。

「いや、参ったよ。なかなか納豆分かってもらえないで……」「納豆？ そういうや、日本出るとき買ってたよ……」

「ああ、こっちにあるか分かんないからな」と父。

「で、納豆の何が問題だったの？」妹の詩織が入ってきた。

「どうやら、納豆を見たことがなかつたらしい。で、連中腐つてい
るみたいだからつて、没収しようとするんだからな…」

「で、結局返してもらえたの？」龍一が聞く。

「ああ、田の前でひとつ食べてやつたら、返してもらえたよ。だけ
どなあ、白いご飯と一緒に食べたかった。まあ、連中食べる俺見
て、いやーな顔してたけどな」

父は大の納豆好き。いや、和食全体が好きといった方が正しいか。

なんとかハプニングを乗り越え、ようやく入国許可が下りた。どう
やら、これから先、まだまだ波乱がありそうな予感。

第4話 入国許可といつある騒動（後書き）

今後は週に1・2話のペースで書いていこうと思います。今後も宜しくお願いします。

第5話 J A F L C i t y (ジャフル市) (前書き)

お待たせしました。第五話の投稿です。

第5話 JAFFL City(ジャフル市)

「お、結構あつたかいじやん。」

「と、いつも暑いくらいだよ～」

龍一の発言に詩織が反応する。

オーストラリアは南半球なので、8月は真冬。その為、吉田一家は、空港を出る前にセーターとコート、それに手袋までした完全防備体制だ。ところが、シドニーの気温は思っていたより暖かいものだつた。ぽかぽかと日差しがあって暖かい。日本で言う小春日和とも言える気温だ。

確かにこの陽気で、これだけ真冬の恰好ではむしろ暑いかもしだい。

“Excuse me, Are you Mr. Yoshida, sir?”

すみません。吉田さんですか？

ひとりの中年男性が、父親に話しかけてきた。

“Ah, certainly, yes. Well, you are...”

ええ、そうですが。あなたは…
父も英語で返す。

“I, I'm Michael M. Corner. I am a staff of ABC Company. I've been waiting for you.”

私はABC社のマイケル・M・コーナーと申します。お待ちしていました。

どうやら、父親の会社関係者なのようだ。

その人の用意したタクシーで走ること一時間、J A F L C i t y (ジャフル市)にある外壁の白い家の前でとまつた。どうやら、龍一たちの新居らしい。2階建てで下はリビングダイニングとなんと6畳の和室が。2階は洋間が3部屋ある。とりあえず部屋割は、広い部屋を両親でひとつ。龍一と詩織は1部屋ずつに決まった。家に着いたのが14時過ぎだったので、とりあえず、ご近所へのあいさつと町探索に行くことに…

「あー、良かった。家の近くに日系スーパーがあつて。」母はほつとしたように言った。家の周りを色々見て回ると、この新居が本当に立地条件が最高だと思った。家から右に5分ほどの所にスーパーがある。当然、日本の食材は売られていない。しかし野菜や卵などは日本の物価からすればかなり安く手に入りそうだ。反対方向に10分ほど行くと、日系スーパーがあつた。値段は現地の店と比較して割高だったが、日本人の日常食が大量に売られていた。焼きそばやカレーのルーといったものは勿論、米・パン・麺といった就職敬、醤油・みりんといった調味料など、日本でふつうに手に入るものが、すべて売られている。

「それにしても、ずいぶんお密さん多いよね。」詩織が誰に言つわけでもなくつぶやく。

「そうね。まあ日本食もおいしいから」母も頷く。

どうやら、日本食ブームがすこし起きているのかもしない。日本食＝健康食のイメージがあるようだ、どうやら繁盛しているようだ。しかも店内には、英語だけでなく日本語表記もいくつかあった。例えば「カーレ」というカタカナ。何かと思って見てみると「カレー」の事だと気づく。さらに衝撃だったのが「ソヌー」なる調味料。いや、これは「ソース」のことである。思わず失笑してしまった父と母。それがあっけにとられているのが龍一と詩織だ。これはあまりにひどい。

取りあえず、米10キロとその他野菜を買って、帰ってきた。これ

からも奇妙な日本語表記と付き合つことになりそうだ。

第5話 JAFL City(ジャフル市) (後書き)

JAFL市といつのは、筆者の作った架空の都市です。

J = Japan

A = Australia

F = Friendship , Foreign

L = Langauge

など、このストーリーに関係しそうな単語を思い浮かべ、それを並べ替えた結果、JAFL市になりました。

オーストラリア（シドニー）の8月平均気温は、最高気温18 なので、日本ほど冬も寒くない見たいです。

Source : All About

<http://allabout.co.jp/area/area/78087/>

これからもこんな感じで、週に数回の更新になると想いますが、今後も宜しくお願ひ致します。

感想や評価を頂けると嬉しいです。

第6話 初登校（前書き）

更新遅くなつて申し訳ないです。

今回からようやく学校生活がスタートします。はたして、どうこつた高校生活になるのか…

読者の方はすでに「存じか」と思いますが、今回の舞台はオーストラリアです。ということは、公用語は当然英語です。しかし、日常会話まで全て英語で書いてしまつと、日本人の方を対象に書いているので、それは難しいものがあります。また、前話までのように英語と日本語訳を併記する方法も、厳しいものがあります。（ 本当はただ単に面倒くさいだけ b よ本音）

そこで、基本的な英語での日常会話も、日本語表記で書かせていただきます。その際、日本語での会話と区別するため、カッコの表示を変えます。

日本語での発言は「 」を今まで通り使用します。

英語での発言を日本語で表記する場合は で表します。

例：

「私は日本人です。」と表記されていれば、これは日本語でそのまま発音したものです。

私は日本人です。 と表記されている場合は、 I a m a J a p a n e s e . と言つているものを、そのまま直接日本語表記していることになります。

そのほか、

英語での発言が重要な場面では、英語と和訳の併記

相手の英語を聞き取れない・意味が分からぬ場合は英語のみあるいは片仮名で聞こえた通りに表記します。

今回からこのルールで投稿しますので、何卒ご理解のほどよろしく
お願いします。

作者

第6話 初登校

今日は龍一にとって、J A F L高校に初めて通う日だ。この日までに家庭教師と会い、簡単な日常会話ならある程度こなせるようになってきた。ただし、勿論普通の授業について行くのも厳しいので、家庭教師を兄妹で付けることになった。外国人の生徒はそれがある意味当たり前のようだ。

龍一はJ A F L高校の1年生として編入することになった。当初は2年生からの予定だったが、やはり言葉の壁や単位の問題から1年生としての方が、無難だろう。詩織は2年生からである。やはり中学と高校では違うのだ。

龍一は1年生のクラスに所属すると同時にE S Lの正規生徒でもある。E S LとはEnglish as a Second Languageの略で、英語を母語としない生徒向けの外国人専用クラスである。詩織もJ A F L中学で同様の立場だ。

前置きが長くなつたが、今朝は転入初日だ。

「とりあえず、おにぎり作つたから。はい、お弁当。」「あー、どうも。」

龍一は母からおにぎり3つ入つた弁当を受け取る。具は「鮭」「梅」「昆布」みたいだ。

食材は自宅近くのあの奇妙な日本語表記があるスーパーで購入できる。表記はおかしいが、種類と量・質はかなりいいものを売つていいのだ。当然、お値段も他店舗と比較して割高だが……

すみません。今日から転校する吉田ですが……

龍一は門で学校の警備員に声をかけた。

ああ、それじゃこっちに来てくれ

警備員の男性は1階にある事務室に案内した。書類を何やら確認するとリューイチだね。時間割はもう決まっているから、それぞれの教室に行つてもうつて、大丈夫ですよ。

龍一はそう言われると、美術室へ向かつた。絵を描くだけなら英語をあまり使わなくてもいいだうとの考えから選択したのだ。どちらにしても、先生の言つている事はほとんど聞き取れず、フラフラになつて1時間目の教室を出てきた。

さて、次はE.Sのクラスだ。このクラスは、英語を母語としない外国人向けのクラスなので、少しは聞きとれるかもと期待して、ドアを開ける。

「へロ～」

教室に入ったが誰もいない。

ま…まあ、まだ休み時間だしね。うん、ちょっと早く来すぎたかな…などと、ひとりごとをいう。

しばらく席に座つて待つていると、2時間目開始のベルが鳴る。

あ…あれ？誰も来ないの？ひょっとして部屋間違えたか？

そう思つて心配していると、教室のドアが勢いよく開いて、生徒がなだれ込んでくる。

遅れた！遅れた！！

ラツキー、先生はまだ来てない

そんなE.Sの生たちと龍一の目が合ひつ。

転校生？ウエアゴーフラム？（どこから来たの？）

「えつと」

「めん、まつたく聞きとれん…

龍一が困っていると、黒髪の女の子が更に英語で聞いてきた。

どこ？中国？韓国？アジアの方だよね？

国の名前を並べてくれた。

アイムフロムジャパン！！

龍一は英語（思いつきりカタカナ発音）で、答えた。

オー、ジャパン！ニンジャ、スシ、テンプレー...

近くにいた金髪男子が日本の単語を言つてくる。

サ...センキュー

とりあえず、お礼言つておけ。

そういううちに、再び扉が開いた。さらに数人遅刻？であろう生徒が何人か入つてくる。周りの生徒に囲まれて数分、三度扉が開く。

みんな、ゴメーン。授業始めるから席ついて

先生…まさかの大遅刻ですか…

赤毛の女の先生が入つてくる。

ワオ！

先生が龍一を見つけて、大げさなリアクションを取る。

ユー

な…なんて言つているのかさっぱりわからん。

急に手を引っ張られ、教室の前に連れ出される。

みなさん。新しく来たりユースイチです。仲良くしてあげてね～

Y e s , M a , a m (ハイ、先生)

龍一の新たな学校生活が始まった。

第6話 初登校（後書き）

なかなか日本語を教えるまで行きませんね…
タイトル「日本語教師」なのに…
もつじばりへ、日本語を教える段階まで気長に待っていてください。

第7話 Manoa & a m o · オハナツ(前書き)

「　」　日本語の発音を日本語表記で
英語の発音を日本語表記で
書いています。

リューイチ、一緒に食べない？

声をかけてきたのは、つい先ほど終わったばかりの授業で隣の席だったKate^{ケイト}だ。ケイトはオーストラリア国籍の生徒である。ちなみに今はランチタイムだ。

ああ、良いよ。そう言えばみんな昼飯^{ランチ}しているの？ 龍一が英語で聞く。

大体は購買でパンとか買ってるかな。あとは、家から何か持つてきてる人もいるみたいだけ…

なるほど。俺も家からbento^{弁当}を持って来たけど

bentoって何

ええと…ランチボックスかな？家から食べる物を持って来たつていうか…

そう言つと龍一は、おこぎりを取りだした。今朝母から渡されたものだ。

ワオ！ rice ball^{ライスボール}！…漫画で見たのとおんなじね…！

ケイトが興奮して言ひ。

えつ？ 漫画？

イエース。日本のマンガ大好きなの！…例えばDoraemonとかCase Closed！とか…

ん？ Case Closed？

そう。日本のマンガだから、日本語で読みたいのよ。

ドラえもんは知ってるけど、Case Closedって何？

エー！…すごく有名なのに知らないの？ひょっとしてマンガとか読まないとか？

いやあ、日本にいるときは大抵のマンガは読んだよ。だけど、Case Closedってのは知らないな

龍一はマンガもある程度は読んでいるつもりである。ところどころ、よつぽど、マニアックなマンガなのだろうか？

ちなみに、どういったマンガ？ストーリーとか 龍一がケイトに

聞く。

「エーとねえ…探偵物のかな。高校生の男の子がある悪の組織について、子どものからだになつちゃうの。で、小学生になつた状態でいろんな推理ショーして解決していく…

ちよつ…ちよつと待て！それ名探偵コナンじゃん。

へ？今何て言つたの。ケイトがはつとして聞く。

いや、だから名探偵コナン。ええと… Detective Conan だよ

日本じゃ Detective Conan って言つんだ！ ケイトが叫んだ。それにつられて、周りからの視線が集まる。

あ…「…」、「…」メン。ケイトが謝る。ねえ、その rice baby ひとつもらつていい？代わりに私のサンドウイッチあげるから。

ああ、良じよ 龍一は2つ皿のおにぎりをつかみながら、答えた。ちなみに今食べているのは鮭だ。さつき食べたのが昆布だったから、ケイトが取った残りは、そう「梅干し」である。

ケイトはおにぎり初体験である。はたして初めてのおにぎりのお味は…？

じゃあ、日本語後で教えてね そういうと、おにぎりを一口かじつた。

ウツ！

ケイトが顔をしかめた。恐らく梅干しを食べたのも初めてだったのだろう。龍一の皿の前で涙目になりながら、おにぎりを食べているケイトがいた。

第7話 Manga & more - おひがつ (後書き)

藤子・F・不二雄氏の『ドラえもん・青山剛昌氏原作の漫画』『名探偵コナン』は、英語での対訳本が出版されています。名探偵コナンの対訳本のタイトルが、"Case Closed!"となります。今回、この漫画を選んだ理由は、作者が英語対訳本も数冊所持しているからであり、特に他意はありません。

第8話 日本語堂々巡り（前書き）

400アクセス超えました。

「　」日本語での発言をそのまま日本語表記で
英語での発言を日本語表記に瞬時翻訳で
書いています。

「う…酸っぱい。何これ？」ice ballってこんな酸っぱい食べ物だったんだ…

梅干しのおにぎりを食べたケイトが言つ。

「いや、具が梅干しだったからね。酸っぱいのは梅干しであつて、おにぎり全般が酸っぱいわけじゃないから。」

龍一がケイトのあらぬ誤解に対し苦笑しながら説明する。確かに、梅干し初体験の人にとっては、衝撃的な味だろう。

「ところで…日本語勉強したいの？」

ケイトの言葉を思い出し、そう言えばと聞いてみる。

「うん、やっぱり日本語の原作を読んでみたいもん。ね、日本語つて難しいの？易しいの？」

ケイトの言葉を龍一は不思議に思つ。

「うーん、俺は日本人だから普通に使つてているけど…でも、何かで日本語は世界一難しい言葉だつて聞いたことはあるんだよね…」

私もそれは聞いたことがあるんだ。こないだ、大学で日本語を勉強している知り合い2人に聞いたんだけど、2人ともまつたく反対の答えだつたの。

「ど、どうと？」龍一は興味を持つて聞いた。

えつとね、日本語を勉強して4年目になる人は、すごく難しいって言つてた。でも、今年から勉強し始めた人はとっても簡単だつて…まあ、2人ともかなりのオタクだけど…ケイトは友人の兄姉が言つていた事をそのまま龍一に投げかけた。

まさか、日本語は簡単だという意見が出てくるなんて思つてもなかつたため、素直な驚きだ。日本語は難しいのか簡単なのか、あるいはどちらでもあり、どちらでもないのか？龍一は、簡単だという根拠を考えた。

（うーん、日本語のどういったところが簡単なんだろ…少なくとも

文字は3種類あるし、漢字何て日本人の俺でさえ読めないのもあるんだから難しいだろうな。文法もあんなややこしい用語とか「かろ・かつ・く・い・い・けれ」みたいなややこしいし、何段活用の末然形がどうのいうのとか、頭混乱するだらうしな）龍一は国語の時間に勉強した国文法を思い浮かべた。彼自身、国語は得意だったが、国文法ほど厄介なものはないと思つていい。

（と…すると、発音か？）

龍一の頭は堂々巡りになつていて、考えながらケイトに聞いた。
その簡単だつて言つた人は、日本語の何が簡単だつて言つたの？
うーん、確かに文法は規則的で分かりやすいつて

えつ？文法？ 龍一は驚きを隠せない。

それと、発音も少し難しいところもあるけど、他の言葉と比べると音が物すごく少ないので楽だつて言つてたよ。

龍一は明らかに動搖していた。日本語の発音はともかく、あの未然形とかのややこしい国文法が外国人にとって簡単だとはとても思えない。

そう、実はひとつ大きな勘違いを龍一はしているのだ。ケイトの知り合いが言う、文法とは、龍一たち日本人が学校で学んできた「国文法」とは、似ているがまったく異なる「文型文法」あるいは「日本語文法」と呼ばれるものだからである。

勿論、今の龍一はその事を知らない。

第8話 日本語堂々巡り（後書き）

参考文献：

小栗佐多里 & サン・トニー・ラズロ（2005）『ダーリンの頭
ン中 英語と語学』メディア・ファクトリー 152 - 157 頁

国語教育プロジェクト（2001）『原色シグマ新国語便覧 増補
改訂新版』文英堂 330 頁

次回はコラムを投稿予定です。

評価・感想お待ちしています。

「コラム」日本語は「難しい?」それとも「易しい?」（前書き）

PV1・000アクセス超えました。

さて、今回は「コラム」として、投稿します。コラムでは物語で出てきた内容やポイントを、少し掘り下げて考えていきます。コラムを読まなくてもストーリー上問題ありませんので、「ご興味のある方のみ読んで頂ければと思います。

今回の「コラム」の検証内容は「日本語の難易度」です。音韻・文法・語彙・文字の4点から簡単な分析をしていきます。また、今後の物語やコラムでは、日本語を「外国語」として扱う場面が多くなると思つので、新たな視点から私たちの母語を見つめてみましょう。

今後も小説『高校生日本語教師』を宜しくお願いします。

「ハムー 日本語は「難しい？」それとも「易しい？」

「ここまで」愛読いただき有難うございます。今回は第8話で出てきた日本語の難易度について、考えてみます。皆さんも龍一と同様に、「日本語は世界一難しい言語」と聞いたことはないでしょうか。何を根拠に、何を基準にして「難しい」あるいは「易しい」と言われるのでしょうか。

米国務省にFSI (Foreign Service Institute = 外務職員局) という機関があります。そこによると、「英語を母語にする人にとって、日本語は最も習得するのが難しい言語のひとつ」とされています。理由は「日本語が最も英語と文字体系・文法体系が異なるから」とのことです。つまり、言語の難易度はどの言語を母語とするかによって、大きく変わることになります。例えば、発音に関して言えば、日本語は母音5個・子音14個で、音声の組み合わせは他言語と比較してもとても少ないです。その意味では外国語として日本語を学ぶ上で、学習者の負担は減るでしょう。しかし、音の単位としては日本語は「拍」なのに対し、英語は「音節」なので、ここは難しいところでしょうか。

文法に関する日本語は、非常に体系化された規則があるので、易しい言語のひとつです。日本語の文法と聞いて、読者の方は学校の国語で習った「国文法」を思い浮かべるかもしれません。しかし、外国人向けの日本語教育では国文法を教えません。第8話の最後にも書きましたが、日本語教育では「文型文法」を使用します。あるいは「日本語文法」とも呼ばれます。日本語文法は学校で学ぶ「国文法」・「学校文法」とは、似て非なるもので、今後物語の中で、特に言及がなければ「文法」とは、「日本語文法」を表わします。

では、「日本語文法」ではどのような文法なのでしょうか。基本的に日本語を外国語として学ぶ人向けに整理されたものです。品詞の名前に関しては、国文法と共通する点もありますが、勉強しやすい

ようにいくつかの項目をひとつにまとめてしまったり、あるいは国文法ではひとつだった項目を細分化してしまったりされています。これだけ読んでも分かりにくいと思うので、英語と比較しながら、日本語文法がどのように簡単なのか説明しましょう。

まず英語ですが、この言葉は文法的に例外が非常に多い言語です。動詞の活用を見てみましょう。例えば *play* の活用は *play - played - played* と規則的に変化します。私たちはこれを「規則動詞」として、学びました。一方で数多くの「不規則動詞」が英語には存在します。例えば *go* は *go - went - gone* ですし、*cut* は変化せず *cut - cut - cut* ですね。これ以外にも日規則に変化する動詞はたくさんあると思います。

一方で日本語は文法的には非常に規則性がある言語です。日本語文法では、動詞は大きく3種類に分類され、すべて規則的に活用します。ほとんどの場合、例外はありません。

動詞は第?グループ（五段活用）、第?グループ（一段活用）と第?グループ（変格活用）に分類されます。そして、ほとんどすべての動詞の活用は、規則通りの変化をするのです。

具体例をあげましょう。

ます形（国文法では連用形）にするには…

第?グループ（国文法では五段活用=「ないのときア段になるもの」）は、語幹 + -imasu

例：*kak - imasu* , *hanas - imasu*

第?グループ（国文法では上一段活用（「ないのときイ段）と下一段活用（「ないのときエ段）は、語幹 + -masu

例：*mi - masu* , *tabe - masu*

第?グループ（国文法ではか行変格活用（来る）とさ行変格活用（する）のとき）

基本的に「来る」と「する」以外は、活用による例外はほとんどあ

りません。第?グループのみ、上記の2種類とは活用変化が異なるため、別グループとなっています。

例：k i - m a s u , s i - m a s u

辞書形（国文法では終止形）

第?グループ（語幹 + -u）

例：k a k - u , h a n a s - u

第?グループ（語幹 + ru）

例：m i - r u , t a b e - r u

第?グループ

例：k u - r u , s u - r u

このように日本語は文法的に非常に体系化された活用をし、例外がほとんどないのが特徴です。このため、文法は易しい部類に入ります。

次は語彙についてです。語彙に関して言えば、日本語は難しい部類に入ります。同音異義語が数多く存在する点や、漢語・和語・外来語などで似た言葉があり、使い分けが難しいのも特徴です。例えば、「試験」「考查」「テスト」など同義語が数多く存在します。これらの使い分けは、日本語学習者にとって非常に難しいものになります。

最後に文字についてです。日本語が難しいと言われる最たる理由がこれでしあう。日本語は平仮名・片仮名・漢字の3種類を同時に使用し、仮名はそれぞれ50音、漢字は常用漢字のみでも、2,136字あります。漢和辞典に載っている漢字も含めれば、その数は膨

大です。

文字は大きく分けて「表音文字」と「表意文字」の2種類に分類されます。「表音文字」は、文字自身に意味はなく、音のみ表わします。この文字の組み合わせにより、新たな意味が作られています。英語のアルファベットや日本語の仮名がこれにあたります。一方で「表意文字」とは、文字自身が意味を持つているものです。日本語の漢字がこれに該当します。つまり日本語の場合、2種類の表音文字と?種類の表意文字を組み合わせていて、日本語の文字は難しいのです。特に、英語母語話者にしてみれば、平仮名と片仮名を50字ずつ最初に覚えなければならないのは苦痛かもしれませんね。

まとめると、日本語は会話をする上では易しい言語で、読み書きの面で難しい言語だと言えそうですね。

「△△」 日本語は「難しい？」 それとも「易しい？」（後書き）

参考文献・資料：

荒川洋平（2004）『もしも：あなたが外国人に「日本語を教える」としたら』スリーエーネットワーク 16 - 19頁

田中寛（2006）『はじめての人のための日本語の教え方ハンドブック』国際言語学社 134 - 137頁

ヒューマンアカデミー（2011）『日本語教育教科書 日本語教育能力検定試験 完全攻略ガイド第2版』翔泳社 第1部

松岡弘監修・庵功雄他著（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク §35 - §36、
巻末付録「動詞・形容詞活用表」

“Language Learning Difficulty for English Speakers.” Wikibooks.

http://en.wikibooks.org/wiki/Language_Learning_Difficulty_for_English_Speakers

第9話 それぞれの思い（前書き）

今回から本編に戻ります。

第9話 それぞれの思い

やつた！日本語を教えてもらえる。

ケイトは日本から来た留学生リューアイチに昼食時、日本語を教えてもらつ約束を取り付けた。彼女はマンガやアニメのマニアだ。いや、日本風にいえばオタクになるか。

日本のマンガは他国の追随を許さないほど、素晴らしい作品なのだ。今までにも英語対訳版がオーストラリアで数多く売られている。勿論、多少他のマンガよりは割高になるが、それでも買う価値があるのだ。

そんなケイトは、日本のマンガを日本語で読みたい。つまりは原作を読んでみたいと思っていた。しかし、それはとても難しい問題でもある。自分の周囲に日本人は誰もいないのだ。親戚に日本語を勉強している大学生がいるが、やはり教わるならネイティブの日本人から学びたいはずである。

そんななか、リューアイチという日本人が転校してきた。これはチャンスとばかりに、ランチの時間話しかけ、一緒に食べたのだ。その転校生が食べていたのは「rice ball」だ。日本語で「オニギリ」というらしい。マンガでは見たことがあるが、実物は初めてだつた。しかも、それを食べたら、恐ろしく酸っぱいのだ。目の前でリューアイチがおいしそうに食べていたし、自分にもおにぎりに対し興味があつたから、食べてみたいと頼んだのだがまさかそのおにぎりという食べ物があれほどすっぱい食べ物だとは思わなかつた。リューアイチは具が酸っぱいだけだと言つていたが、ケイトの中ではおにぎり＝酸っぱい。自分では食べられないとして、印象に残つている。

そんなトラブルもあつたが、無事日本語を教えて貰えたこととなつた。ケイト自身は少しだけ日本語について調べてみたが、その難易度はよくわからなかつた。というのも、簡単という人と難しいという人のインターネットでの書き込みを数多く見たからだ。

果たして…

一方龍一は、ケイトの頼みを戸惑いつつも嬉しく思つていた。自分は日本人だから、日本語を教えるのは訳ない。それどころか、女子と仲良くなるきっかけになる。ケイトは結構可愛いしマンガを通して日本や日本語に興味がある。ひょっとしたら日本語を教えることで、親密な関係になれるのではないか。それは龍一の密かな期待であつた。一方で、日本語を教えるにしても何からどうやつて教えればいいのか見当もつかない。マンガを読むのなら平仮名や片仮名・漢字も覚える必要があるだろう。だが、文字の数は非常に多いのだ。そんな彼は、ある一人の顔が浮かんだ。そう、日本にいる親せきの叔父さんだ。この人は実際にボランティアとして、日本語を教えているし、以前教科書をもらつた氣もする。とりあえず、龍一は出国前に必要になるかもしれないと言つて、叔父さんから譲つてもらつた（押しつけられた）日本語の教科書を引っ張り出した。まだ、段ボールに入つていたが、大抵のものはすでに出ていて比較的すぐに見つかった。

教科書はB4判の大きさで、白とピンクの表紙だ。

『みんなの日本語初級？本冊』

タイトルはこう書かれていた。

とりあえず、この教科書を使って教えていこう

龍一はそう決意した。

第9話 それぞれの思い（後書き）

「はじめに」でも触れましたが、今回スリーエーネットワーク社の『みんなの日本語初級』を物語上教科書として使用します。なぜ、この教科書を選択したかは、単に筆者がボランティア教室で日々使っているため、なれた教科書の方が、今後扱いやすい点と、ボランティア教室から教科書を借りられる為、金銭面からもこの選択となりました。

念のため、誤解があるといけないので申し上げておきますが、この教科書やその他多くの参考文献を取り上げているからといって、営利目的ではありません。同社を始め、その他の出版業界とも筆者は一切関係ないので、予めご了承ください。

参考文献：

『みんなの日本語初級？ 本冊』スリーエーネットワーク

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0347y/>

高校生日本語教師

2011年11月24日15時50分発行